ヒルデスハイム国際セミナー派遣報告書

氏名：フィオレッティ・アンドレア

派遣先：ヒルデスハイム（ドイツ）

派遣期間：**2012** 年 **11** 月 **20〜26** 日

派遣（研究）の内容：

ヒルデスハイム大学で 2012 年 11 月 23 日午後、「日本近代小説における発言の書き方（“Writing the voice in modern Japanese fiction”）」と題する発表をおこなった。発表では、小説の近代化、小説における句読法の使用、音読から黙読への移行という問題について、 日本と西洋文学の比較分析を提示した。この分析では、ダニエル・デフォーとローレンス・スターンなどの十八世紀のイギリス人作家、樋口一葉と二葉亭四迷などの明治初期の日本の作家に言及し、かれらの作品から具体例を取り出した。

明治初期とイギリスの十八世紀後半を比較対象として取り上げたことには理由がある。ヨーロッパと日本ではそれぞれ時代において、音読から黙読へと読書形態が移行したのに伴い、文学のテクストにおいて様々な視覚上の仕掛けが導入され、小説を近代化する試みがなされた。こういった現象は、日本とヨーロッパのそれぞれの文学史上で異なる文脈を持つとはいえ、ほぼ同時代に発生し、文学受容における根本的な転換の徴候として見なされる。

たとえば、樋口一葉の『たけくらべ』は、明治時代の日本近代文学を代表する作品の一つであるにも関わらず、文体論的にも技法的にも日本の前近代文学と密接に結びついている。そのため、一葉の作品は、現代読者の理解を助けるために文章を近代化する試みの対象となってきた。私の発表では、特に段落の分け方やかぎ括弧による地の文と登場人物の台詞との区別などの点をめぐって、『たけくらべ』の原文とその現代語訳とのいくつかの相違を紹介した。

この比較から明らかになったのは、朗読に適した形で一葉によって書かれていた原文と、黙読の場合でも読みやすい形で整理された現代語訳とのコントラストである。批評家の前田愛は、「音読から黙読へ」というエッセイで朗読と黙読の問題に触れている。その中から二葉亭四迷の『浮雲』に関する考察を、私の発表では引用した。

発表の後半では、西洋文学のケースを取り上げ、ロビンソン・クルーソーから議論を始めることにした。ダニエル・デフォーによるこの有名な小説は、1719 年の初版では、章と章との区別がなく、当時の印刷上の基準に従って、直接話法が引用符によって地の文から分離されていなかった。しかし、それ以降の版では、編集者がこの小説の絶大な人気に促されて、徐々に増えつつあった黙読者の聴衆がより読みやすい、近代化されたバージョンを出版するようになった。同時に、子供の観客をも作品に親しませるため、翻案や単純化されたバージョンが発表されていった。

発表では、様々なスライドを見せながら、多様なバージョンを比べ、 新しい文学受容のメカニズムが現れた結果、引用符のような視覚上の工夫が採用されたことを示した。視覚的な技法で最も興味深い例は、おそらくローレンス・スターン（1713-1768）の『トリストラム・シャンディ』（*The life and opinions of Tristram Shandy, Gentlemen*, 1759～1767 年）であろう。スターンはこの小説の中で、ダッシュ、ハイフン、アスタリスクなどの記号、白いページや黒ずんだページ、絵までを所々で使用した。この独特なエクリチュールの実験主義は、作家たちが大衆による新しい文学テクストの受容の根本的な転換に取り組まなければならなかった過渡期ならではの試みだと考えられる。

受容理論は、ヴォルフガング・イーザー、ハンス・ロベルト・ヤウス、ロラン・バルトらによって取り組まれてきた文芸批評の領域である。しかし、日本文学との比較分析の例は少ない。なので、日本と西洋文学を比較することで、文芸批評の分野に新しい視点や事例を紹介したいと考えている。

<u>派遣による研究の成果</u>：

ヒルデスハイム大学のような刺激的でアカデミックな環境で自分の研究を発表する機会は、私の研究生活にとって非常に有意義かつ貴重なものであった。2011 年 10 月から 2012 年 9 月にかけてイタリアに滞在した際、論文で用いる参考資料を数多く集め、それらの分析にあたった。そして、ヒルデスハイムの国際セミナーのおかげで、イタリアで進めた研究の課題がより鮮明になった。研究成果をアカデミックな場で紹介し議論することで、自分自身の研究をより明確に理解することができ、また、論文執筆という目的においても、より確かな方向性に達することができた。

加えて、私の発表原稿は、2013 年内にヒルデスハイムのセミナー論文集に掲載されることになった。博士論文で扱うテーマに関連する論文を出版する機会が得られ、幸いである。発表では様々な文学テクストをスキャンした資料を使用したため、当然ながら発表原稿に手を加える必要があった。口頭

発表用に準備したスライドを取捨選択し、わかりづらいところには説明の文章を加えた。ヒルデスハイム大学の出版担当者には原稿を送り終え、現在は校正の指示を待っている。

<u>今後の課題</u>：

　帰国後は、上述の研究方針で、博士論文の執筆作業に入る予定である。とりわけ、明治初期と十八世紀後半の他のヨーロッパ人作家たちの作品を取り上げ、比較する。中心的な分析対象として考えているのは、小説や短編における句読法や語りの方法である。ここに着目することで、文学の受容メカニズムが、時代につれてどう変化してきたか、音読から黙読への移行といった現象がどのような形で小説の書き方に影響を与えたか、明らかにしていきたい。